



ピタインダカン

(おさみがりにぼし)

第 52 号

発行日 2025 年 6 月 1 日

発行人 矢代 しず

秋田県御野郷 7-1-29-305

声

午前七時過ぎ

いつもの声が走ってくる

声の輪郭はさやかに

活気のある甲高い音

今日は弾んでいようだ

バス停のあたりから

転がってきた声は

キャンギャンギャンと

翌朝

バス停で待ちかまえた

静寂を破る声は喜びの黄色

走ってきたのは愉快的な玩具

白いもふもふの尾っぽは

柔らかく真綿のよう

友

人心計りがたしや二月尽

——母の句

寂しい暗さのなかにいます

七十四歳の友は

母のにおいのする部屋で

百^も寿を目前に

ふーっと消えた

いのちの記憶をたどっています

あの日から
二ヶ月が経ちました

灰色の空から

ひらひらと

薄く

やわらかな

風花が舞ってきました

白い風は

哀しみも運んできました

友人は

彼女

看取った日々を追慕する

胸の風呂敷にたたみ

ぬくもりを

かけがえのない

心あたたかい人の
姿は見えない

が

きつと

ふるさとに還ってきます

母親と胎児をつなぐ
へその緒のような川も
どつしりと構える山も
夕日に染まつた景色も
変わらない

二月も末を迎えました
澄みきつた冷気に
身が引き締まります

ひっそりと

哀しく

心ふるわせている

友に

慈雨で生き返る作物のような
安らぎを与えられないか

黒い額縁の

フィルムを剥がし

ひよこつと現れる
母との
楽しい一時を――

友よ

いつしか

心のさざ波も消えて

記憶の奥の方から

無性に会いたい人の

いのちの声が

聴こえてくる

よ

やがて春

日の雫こぼして氷柱やせにけり

——母の句

高圧電線の鉄塔は

重々しい脚で

二月の大地を踏んでいる

幾何学模様の

長い脚のあいだから見える

田んぼの

真一文字の景色は

春へとつづいている

畑に敷かれた

黒いマルチシート^{*}の穴から

越冬野菜の

玉ネギやニンニクが

春を待ちわびる

健気な顔を覗かせている

やがて

春が

靄の衣を纏った
景色が静かに眠っている
高い空も
遠くの山も
鉛白の海のなか

春はまだ遠い

それでも

道路脇の雪は

日増しに嵩を減らし

薄汚れた帯を延ばしている

景色を染め

生まれたての

乳白色の光のなかで

微笑む

＊畑の畝を覆うための資材

老い

萌える季節に

ベンチに座っている

老人

視線の先には

忙しく行き交う

蟻の群れ

老人は

ポケットから

きちんと折りたたまれた

朱色のハンカチを取り出し

瞑目

眼裏に浮かび上がったものは

大切なひとの

花のような笑顔

あれから

十年

いまでも

夕やけのような悲しみが

老人をつつみ込んでいる

顔を上げ

真っ白い雲を眺めると

妻との会話が思い出された

プルシアンブルーの空で

寄り添って浮かぶ雲は

清らかさを集めた

ふたりの舟ね

やがて

老人は

愛しい声の匂いのなかに
戻って行った



徒然のエチュード 49

①

歩道のドウダンツツジ
秋色も深く影をさして……

次の一步で
飛び上がった！

薄いピンクに縁取られた
ブリッとした物体が
歩道の真ん中に

ダダミ色の大腸！

生々しいが
気味悪くはない
端っこに黒い物がついている

肛門だろうか？

大型の生き物か
バケツに一杯分はある
しかし
肉体がない！

以前

山中で出くわした
イタチかテンの死骸は
腹を裂かれて
ペタンコのお腹
外形はそのままだった

歸りに
恐る恐る通ると
もぬけの殻

？

??
???

②
しばれる朝
ゴミ袋を持つて
小屋へ

開かない！
戸が凍っている

ウゝ ウオゝ

開かないよ！
こんな時に限って
誰も来ない

ヨイシヨ ドッコイシヨ

十分間の格闘
諦めた！

凍った道を
ゴミ袋を持つて
すごすご
退散

カチャカチャ
パリパリパリリン

歩きたびに
氷が笑う

③

テレビの

グルメ情報に見入った

美味しそう！

食べたいな

イタツ！

ひもじいからって

自分の舌は

食べるものじゃないわね

。° (° ´ ▽ ` °) °。

④

きなこ
黄粉鳥の初音

ㇿ ホーホ キョキヤ キヤキヨ

やがて
のびやかに

♪ ホゝ ホキヤキヨ キヤキヨ

わたしも
負けずに

♪ ヘイヘイビゝ ヘイヘイブゝ

⑤

年をとって

足も短くなったので

娘のお下がりの

半ズボンをはいてみた

ピッタシカンカン

⑥

【書道は行書ではじめよ

文章は楷書ではじめよ】*

詩は動恋書^{うつついしよ}ではじめよ

⑦

フフフフ

笑い声で

午睡の夢が覚めた

辺りを見渡しても

だれもない

椅子に腰かけたまま

矢代レイは

眠っていたのだった

へろへろぺろんぺ

*外山滋比古著『日本の文章』より

【ご案内】

矢代レイ詩展——詩を書くよろこび——

日時 7月1日（火）～7月31日（木）

時間 9時～15時 無料

場所 秋田銀行本店 ロビー

秋田市山王3・2・1

なお、土曜日・日曜日・祭日はお休みです。
お問い合わせは、矢代レイまで。

☎ 090・1935・1180

【あとがき】

一年の第六番目の月がきた。若々しい木の葉が風にゆれている。つややかな葉の茂りは目にさわやかな黄緑色。風の呼吸に合わせてそよいだり、踊ったり。

パソコンの手を休め、しばらく見とれる。ふいに、まぶしい青葉の波に引き込まれる。ゆつくりと心が開かれてゆく。

神経をとき澄ますと、見えてくるもの、聴こえてくるものがある。わたしのなかで生まれたてのことばがうごめく。

*

ことばを紐でつなげて詩にする。今だから描ける詩、今しか描けない詩。ことばと向きあう時間が、この上なく楽しい。幸せである。

